一般社団法人
日本肩関節学会
Japan Shoulder Society
Newsletter 05
2015.08

理事長あいさつ（日本肩関節学会の近況）

一般社団法人 日本肩関節学会理事長　玉井和哉

残暑お見舞い申し上げます。

2014年10月23日に理事長を拝命して以来、9か月が過ぎました。ここで皆様に最近の学会の状況を報告したいと思います。

まず、今年度は新代議員を10名募集することにいたしました。代議員は一般社団法人・日本肩関節学会を構成する社員であり、学会運営の主体です。その数は正会員（現在1,600余名）の2～4%と定められておりますが、現在は理事・監事を含めて47名であり、理事会等で審議した結果、毎年5名程度の増員が適切ではないかと考えました。2014年は法人化と事務局移転にともなう膨大な事務量のため募集を見送りましたので、昨年度分とあわせて10名を募集することが社員総会で承認されました。代議員の分布につきましては、代議員不在の県が多い、特定の大学に偏っている、といった意見が以前からあり、理事会・社員総会で現状を分析するとともに改善策を検討しました。しかし立候補者の活動性、患者数などを反映した分布になることも当然であり、今回は従来同様、自主的な立候補制によって募集することになりました。新たに選ばれる方々には是非とも学会のために力を発揮していただきますようお願いいたします。

2つ目に、教育研修会のあり方が今年から変わりました。日本肩関節学会の教育研修会は従来、学術集会の翌日に集中講義の形で行っておりましたが、今年はキャダバーワークショップを9月26日に札幌医科大学で行うことになりました。キャダバーを用いる公式の教育研修会を国内で実現できたことは画期的で、井樋栄二前理事長、末永直樹理事、船越忠直委員長、そして札幌医大解剖学教室と青木光広先生のご尽力によるものです。この場を借りて準備を進めてくださった多くの関係者に心から感謝申し上げます。また同日、手術手技フォーラムも開催いたします。従来のような講義形式の教育研修会は、学術集会と別日程とはせず学術集会期間中に行います。このような教育研修の形がよいかどうかはまだ分かりません。研修受講者や講師の皆様のご意見をお聞きして、より良い方式を求めていきたいと思いますので、忌憚のないご意見をお寄せいただければ幸いです。

3つ目は、教育研修と関連がありますが、手術技術認定のあり方について議論する場を設けることにいたしました。2017年4月からスタートする新専門医制度において、今のところ、整形外科専門医更新の要件に手術技術それ自体は含まれておりません。一方、整形外科のsubspecialtyごとの手術技術認定はすでに一部で行われており、とくに肩関節鏡は他部位を含めた関節鏡技術の一部と捉えられてしまう傾向もあります。鏡視下・直視下どちらの技術にもすぐれた総合的な肩関節外科医が理想であることは言うまでもありません。時期尚早という意見もありましたが、われわれの持つ肩関節の手術技術をどのように標榜すべきかを考えておくことは有意義であると考え、『手術技術認定のあり方ワーキンググループ』（仮称）を発足させることにしました。繰り返しになりますが、これは認定制度を作ることを前提としているものではありません。むしろ認定制度が必要なのかどうか、肩関節の専門家であることを社会に正しく理解してもらうにはどうしたらよいかなど、われわれのアイデ

ンティティーについて討論をする場とご理解いただきたいと思います。

４つ目として日本肩関節学会 40 年史の編纂事業についてご報告します。ご存知のように日本肩関節学会は昨年、40 周年を祝いました。多くの会員にこの間の歩みを知っていただきたいと考え、また貴重な資料が散逸してしまわないよう、40 年史編纂委員会（井手淳二担当理事、筒井廣明委員長）を組織して記録を残すことにいたしました。会員の皆様に寄稿や写真の提供をお願いしたところ、多くの方に快くご協力をいただきました。大変ありがとうございました。本年秋には日本肩関節学会のホームページに 40 年史ウェブサイトをアップする予定です。どうぞ楽しみにお待ちください。

最後に、本年２月以降、株式会社アイ・エス・エス (ISS) には熱心に事務局業務に取り組んでいただき、現在、スムーズに作業が行われていることを申し添えます。

今後も引き続き理事、代議員の皆様と意思疎通を図り、協力して日本肩関節学会の前進のために力を尽くす所存です。何とぞよろしくお願い申し上げます。

第 42 回日本肩関節学会会長あいさつ

第 42 回日本肩関節学会　会長　井樋栄二　（東北大学医学系研究科外科病態学講座整形外科学分野）

第 42 回日本肩関節学会の開催まで残すところ２ヶ月余となりました。現在鋭意準備を進めているところです。演題は予定通り５月 11 日の正午で受付を締切りましたが、過去最高の 460 演題の申し込みをいただきました。誠に有り難うございます。代議員の先生方の査読の結果、435 演題を採択することにしました（採択率 95%）。肩関節という限られた分野の研究発表ですので、１つの会場でできるだけ多くの人に発表を聞いてもらいたいと思います。口演が３つや４つの会場に分散することは避けるべきです。本学会では口演は２会場に限定し、なおかつシンポジウムや特別企画などは１会場でのみ走らせることにしました。その結果、一般演題の口演採択は 65 演題（14%）となり、ほとんどの演題がポスター発表ということになりました。この点をまずご理解いただきたいと存じます。ポスター発表は演者と聴衆の距離が近いので本音で話しやすいという利点があり、ワインとチーズも用意致しますので、質問をぶつけ合って思いっきり議論していただきたいと思います。また、去年の森澤佳三会長のときと同様、第1会場の発表は英語のみとさせていただきます。海外の先生方は第1会場にいればすべて内容が理解できるというプログラム構成にすることで、より国際化の流れを加速させたいと考えております。学会を楽しむ一つのコツは演題を黙って聞いているのではなく、質問をすることです。そのほうが発表に興味が湧きますし、遥かに理解が深まります。ぜひ積極的に質疑応答に参加していただきたいと思います。とくに英語セッションでは明日の本学会を担う若手の先生方はぜひ積極的に参加していただきたいと思います。国内学会で英語の発表をし、英語での質疑応答に慣れることで、次の国際学会での発表に着実に備えることが出来ます。

海外講師としては、北米大陸を代表してアメリカの Robert Neviaser 先生、南米大陸を代表してブラジルの Sergio Checchia 先生、ヨーロッパ大陸を代表してオーストリアの Herbert Resch 先生、そしてアジア大陸を代表して韓国の Kwang-Jin Rhee 先生をお招きしました。そして特別企画では、大陸間の交流を通してどのように肩関節外科が発展してきたのかを４名の先生方にご講演いただき、日本を代表して信原克哉先生に日本と諸外国との交流についてご講演を頂くことになっています。肩関節外科発展の歴史を振り返ることで、今後の方向性を見いだすこと、そしてさらに大陸間の交流を深めることを目的とする企画です。これも国際化を目指す本学会の方針に則った企画の一つです。

今回の学会から、これまで学会終了後に開催されていた教育研修会を学会期間中にプログラムの中で行うことになりました。時間の制約のため２枠、２時間しか時間を取れませんでしたが、この講義形式の研修講演と並行して９月 26 日には札幌医科大学の協力のもと、本学会 41 年の歴史の中で初めての「遺体を用いた手術手技研

修会」を本学会主催で開催することになりました。こちらはすでに定員を上回る参加申し込みがありましたが、今後毎年この企画を続ける予定ですので、奮ってご参加下さいますようにお願い申し上げます。

本学会では「肩の病態解明を目指して」を標語にさせていただきました。お陰様で病態解明に関わる多くの演題をお寄せいただきました。基礎的、臨床的研究を通して、疾患の本質に迫ることが、その疾患を正しく理解し適切に治療してゆく上で不可欠なことです。この点を蔑ろにして手術手技の細かいことにばかり気を取られてはいけません。日本の肩学会が世界に誇るべきことは、歴史の古さではなく、その歴史にちりばめられた先人たちの業績、病態に迫る素晴らしい業績です。そのことに思いを馳せ、この学会で今一度原点に立ち返って我々の進むべき道を考える機会にしていただければ会長としてこれに勝る喜びはありません。

東日本大震災から 4 年半が経ちますが、復興はまだ道半ばです。沿岸部への被災地ツアーを通して直に震災の大きさを体験していただきたいと思います。と同時に、10 月は春と並んで仙台がもっとも美しい季節です。定禅寺通りのケヤキも色づき始めることでしょう。ちょっと内陸に足を伸ばせば鳴子温泉郷、蔵王など風光明媚なところが沢山あります。被災地ツアーとともに仙台周辺の深まり行く秋を楽しんでいただければ幸いです。皆さんのご来仙を心からお待ち致しております。

委員会報告

雑誌『肩関節』編集委員会からの報告

委員長　濱田一壽

今年度から雑誌『肩関節』への投稿は web 経由になり、投稿規定は大幅に変更になっております。そのため多くのご質問を受けました。それらの中から抜粋して回答と一緒に以下に記載します。さらにいくつかの投稿論文を書類不備等のために返却しております。今後の投稿時のご参考にしてください。

	問答内容	回答
1	投稿画面のユーザー名と PW を教えてください。 肩関節の ID と PW では入れません。	新規でユーザー登録してください。
2	共著者の出身・在籍医局の確認はなぜ必要なのでしょうか？	査読者を選定する際、著者・共著者と関わりの少ない方を査読者として割り当てるために、共著者の卒業大学、所属医局についてもお聞きしています。
3	論文投稿の際、二重投稿に関する誓約書、利益相反自己申告書　などに自筆サインいれてアップロードする方法。	ダウンロードしてプリントアウトした紙面に自筆サインして、スキャナーで JPG または PDF で取り込み、そのファイルをアップロードします。
4	Senior author 確認表の提出は必須ですか？	Senior author がいらっしゃらなければ提出不要です。
5	チェック表の論文番号、利益相反申告書の受付け番号は空欄でよろしいでしょうか。	論文番号は第 41 回学術集会時の論文番号を記載してください。受付番号は未記入でお願いします。
6	タイトルページから図表説明までは「＊論文原稿」という一つのファイルとしてアップロードでよいですか？	ページ No. を振っていただくので、ひとつのファイルでアップロード可能です。
7	英文の抄録に関する記載がないと思いました。英文の抄録は以前と同様でしょうか？	英文抄録は廃止されました。日本語抄録のみでお願いします。
8	投稿サイトにはカバーレターをアップロードするところがありますが、カバーレターはタイトルページで良いのでしょうか？	カバーレターとタイトルページは異なります。カバーレターのひな形は現在作成中です。現時点では MS Word ファイルなどで作成してください.
9	図の投稿方法がわかりにくい。	図表は 1 つずつ図表のみのファイルを作成して頂き、図表の説明は図表中には記載せずに文献の後の図表説明の部分に一括して記載して下さい。
10	半角文字は 0.5 字と計算してよろしいでしょうか？	本文、proceeding とも半角文字の計算は 0.5 字です。
11	参考文献としてインターネット上のみで公開されている文献の記載方法は？	論文への記載方法は、組織名 . タイトル . HP address で問題はございません。

12	他の学会で今回の投稿論文の一部を発表しているが、論文にしていません。今回、この研究を論文にまとめて投稿しようと考えています。	二重投稿にはなりませんが、タイトルページ脚注にいつ何という学会で発表したのかを記載してください。
13	論文タイトルですが発表したタイトルから若干の変更を加えることはよろしいでしょうか？	若干の変更は可能です。
14	他雑誌にまだアクセプトされていない論文を『肩関節』に投稿する場合は二重投稿になりますか？	他の雑誌に投稿中の論文は二重投稿となりますので雑誌『肩関節』には投稿できません。Proceeding としての投稿であれば投稿可能です。その場合には二重投稿同意書は必要ありません。
15	高岸直人賞への応募論文は英文で作製しております。JSES 以外の英文雑誌にまず応募しようと考えておりますが問題ないでしょうか？	高岸賞の候補論文は雑誌『肩関節』に必ずしも投稿しなくても良いことになりました。JSES 以外の査読のある英文雑誌でも問題ありません。雑誌『肩関節』へもご投稿いただけるようでしたら proceeding でお願いします。
16	臨床研究において「1 年以上」の follow up でないと受理されないのでしょうか？（「骨折」に関しては、認知症などもあり、1 年以上の follow up は非常に困難であると思われます。）	投稿者側には 1 年間の経過観察ができないさまざまな理由があるでしょうが、1 年近い経過観察ができるのに行わない場合には受理しないことになるでしょう。最終的に編集委員会で判断いたします。できるだけの努力をお願いします。
17	コンバインドセッションで発表した演題の投稿は可能でしょうか？	総説として投稿が可能です。編集委員会が認めれば掲載できます。
18	PT、OT などの準会員は本誌への投稿は可能でしょうか？	PT、OT 等の非医師は、準会員になれば、雑誌『肩関節』への投稿は原著として可能です。

論文を返却した理由で多かった事例

・利益相反自己申告書が主著者しかない。
・カバーレターがない（タイトルページと混同している）。
・タイトルページの記載内容が、前回までの投稿規定の内容（連絡先の記載・別刷数・カラー印刷の有無など）。
・タイトルページに、抄録がない（EM の投稿時に web 上で抄録を記入するからか？）。
・Senior author 確認表がない。
・論文の構成がバラバラ（アップロードしても修正方法がわからないとのことで事務局での代理操作が難渋）。

皆様のご理解ご協力をよろしくお願いいたします。

担当理事	委員長	副委員長	委員
中川照彦	濱田一壽	岩堀裕介 内山義康	石毛徳之　柏木健児　後藤昌史　下川寛一　中川滋人　丸山　公 石田康行　菊川和彦　小西池泰三　杉本勝正　中溝寛之　村　成幸 伊藤陽一　北村歳男　小林尚史　鈴木一秀　橋詰博行　山崎哲也 岡村健司　後藤英之　西須　孝　田中　稔　原　正文

QOL 評価表検討委員会からの報告

委員長　衛藤正雄

QOL 評価表検討委員会は 2013 年に前年度まで活動していた JOA スコア再検討委員会を引き継ぐ形で発足しました。JOA スコア再検討委員会では患者立脚型の肩関節機能評価表である Shoulder 36 を作成し、その有用性についてはすでに報告がなされています。QOL 評価表検討委員会では①腱板断裂、②肩関節周囲炎、③外傷性肩関節前方不安定症、④リウマチ肩に対する Shoulder 36 の反応性と信頼性を調査することになりました。その後、期間内にリウマチ肩の症例数が十分に集まらないとの判断から、腱板断裂、肩関節周囲炎、外傷性肩関節前方不安定症の３疾患について調査を行うことになりました。腱板断裂は 61 例の症例が集まり、結果は反応性において有意な中等度以上の相関を認め、医師による重傷度判断はすべてのドメインに対し高度な水準で有意な影響を与えていることがわかりました。信頼性においても、ほぼ満足すべき結果が得られ Shoulder 36 は腱板断裂患者の患者立脚肩関節評価法として、満足できる反応性と信頼性を有することが確認できました。この内容は第 41 回日本肩関節学会学術集会で発表しました。肩関節周囲

炎は56例の症例検討を行い、医師による総括重症度判断と各ドメインとの相関および各ドメイン別test-retestの級内相関係数を調べました。その結果、Shoulder 36は高い再現性を示し、肩関節周囲炎に対して有用な検査法であることが確認されました。その内容は第42回日本肩関節学会学術集会で発表予定となっています。また、外傷性肩関節前方不安定症は現在、調査は終了しており、データの解析中で、第43回日本肩関節学会学術集会に発表する予定となっています。

今後は、種々の肩関節疾患に対するShoulder 36の利用を普及させるための広報活動を行って行く予定です。

担当理事	委員長	委員	アドバイザー
畑　幸彦	衛藤正雄	相澤利武 酒井清司 名越　充	三笠元彦

国際委員会からの報告

委員長　菅谷啓之

国際委員会は、菅本一臣先生を担当理事とし、委員長菅谷啓之、委員として髙岸憲二先生、池上博泰先生、佐野博高先生、船越忠直先生、三幡輝久先生、望月智之先生に加え、次期会長井樋栄二先生、次々期会長望月由先生を加えた総勢10名がメンバーとなります。過去1年の活動としては、①2014年より隔年で派遣することになったASESトラベリングフェローとして2014年10月9～12日のASESのClosed Meeting（Pinehurst, NC）の前後4週間、東北大学の山本宣幸先生と北海道大学の船越忠直先生を派遣いたしました。また②KSESと1名ずつ隔年で欧州に派遣しているSECECトラベリングフェローとして、2014年9月17～19日のSECEC（Istanbul, Turkey）の前後4週間、松山赤十字病院の大前博路先生を派遣いたしました。さらに③2014年5月に募集を開始し、委員における書類選考および10月の第41回日本肩関節学会中に開催された候補者による英語プレゼンテーションおよび質疑応答を経て選考された福井総合病院の山門浩太郎先生、船橋整形外科肩関節肘関節センターの高橋憲正先生の2名を、2015年4月末のKSES annual meetingから4週間韓国に派遣しました。④フランス、レンヌのDr. Philippe Collin他の先生方の下へ、東京女子医大の安井謙二先生を2014年10月より2015年6月まで派遣いたしました。これらの単発フェロー募集は不定期に行っており、その都度会員全員にメールを配信しておりますので希望者は積極的にご応募下さい。⑤2015年は9月末から第42回日本肩関節学会までの2週間SECECトラベリングフェロー2名の受け入れを行う予定で、既に受け入れスケジュールも決定しております。今年度の受け入れを行ってくださる先生方は宜しくお願い申し上げます。また新たに2016年1月には、同年秋に派遣するASESトラベリングフェロー2名、SECECトラベリングフェロー1名の募集を、また5月には2017年春に派遣するKSESトラベリングフェロー2名の募集を開始いたしますので、皆様奮ってご応募下さい。また、国際委員会では、個人的な長期海外留学の門戸を常に開いておりますので、海外留学に興味のある学会員は遠慮なく国際委員会メンバーにお声掛けください。

担当理事	委員長	委員	次期会長	次々会長
菅本一臣	菅谷啓之	池上博泰　船越忠直 佐野博高　三幡輝久 髙岸憲二　望月智之	井樋栄二	望月　由

髙岸直人賞決定委員会からの報告

委員長　黒川正夫

髙岸直人賞の対象論文の規定を以下のように変更し、ようやく２年が経過しました。ようやく定着しつつあるように思われますが、再確認をお願いしたいと思います。

髙岸直人賞の対象論文は 1．当該年度の 12 月 31 日時点で満 45 歳以下の会員の発表論文であること、2．候補論文は当該年度の日本肩関節学会での発表論文であること、3．対象論文は Update で魅力的で素晴らしい論文であること、4．髙岸直人賞の審査対象論文は肩関節学会抄録集から選ばれてノミネートされた論文の中から，Full paper が期限内に提出された論文とする、5．審査の対象となる論文は日本文、英文のいずれでも可とする、6．上記の条件が満たされた論文は雑誌「肩関節」、JSES 以外の雑誌に投稿しても可とする、7．審査対象はノミネートされた論文の Full paper ですでに Publish されたものは含まないとされています。御覧のように髙岸直人賞は過去の受賞者が候補から除外される以外には、45 歳という年齢と当該年度の日本肩関節学会での発表論文という２つの縛りのみになっています。

このルールに基づき本年度の髙岸直人賞は５月 23 日（土）に神戸で行われた本委員会で以下の二つの論文に決定いたしました。基礎的研究論文は熊本大学の徳永琢也先生の「血小板由来成長因子含有ゼラチンハイドロゲルによる腱板修復促進」が、臨床的論文は市立豊中病院の水野直子先生の「日本人の肩甲骨関節窩―フランス人との比較検討―」がそれぞれ最高点で髙岸直人賞受賞者として選出され、過日お二人に通知いたしました。

今回は髙岸直人賞、ベストアブストラクトの選考行程についてご説明します。日本肩関節学会に応募されたすべての抄録を対象にして髙岸直人賞候補と並行してベストアブストラクトを選考します。今年は学術総会会長にお願いして選んでいただいた基礎論文 22 編、臨床論文 56 編から基礎・臨床論文抄録各上位５編ずつを代議員の先生に選んでいただき、この中から基礎、臨床各々上位８編ずつをベストアブストラクトとして選定し、ネイティブチェック（肩関節学会で依頼）を受けたうえで、JSES に抄録を投稿します。さらに年齢 45 歳以下で過去の髙岸直人賞受賞者を除外して基礎、臨床各々上位８編ずつを髙岸直人賞候補として推薦することになります。候補演題は公開され、髙岸直人賞決定委員会の委員は学会当日に選ばれた演題の口演を聞き問題のある論文があれば委員会に報告をします。その後、髙岸直人賞候補論文として期日までに投稿された論文を１．論文のまとまり (わかりやすく、論旨が明確か)、２．独創性 (オリジナリティがあるか)、３．充実性 (症例数、分析方法が十分か)、４．有用性 (将来の発展が期待できるか) の各項目５点、20 点満点で点数をつけ、翌年の日本整形外科学会学術集会の期日中に開催される委員会で決定しています。

お忙しい中、髙岸直人賞、ベストアブストラクトの論文選定にご協力をいただいた会長井樋栄二先生はじめ、すべての代議員の先生に心からお礼を申し上げて、委員会報告と致します。

担当理事	委員長	委員	
井手淳二	黒川正夫	青木光広	後藤英之
		伊﨑輝昌	髙岸憲二
		井樋栄二	橋口　宏
		熊谷　純	森澤佳三

社会保険等委員会からの報告

委員長　橋口宏

本年度より中川照彦先生が副担当理事に就任されました。中川照彦先生は担当理事である米田稔先生と伴に社会保険等委員会の前委員長として肩関節手術の保険収載に多大な貢献を戴きましたが、今後も引き続き副担当理事としてお力添えを戴けることになりました。さらに本委員会の構成も委員長橋口宏、委員として岡村健司先生、

菊川和彦先生、菅谷啓之先生、杉本勝正先生、鈴木一秀先生、高瀬勝己先生、名越充先生、望月智之先生、森澤佳三先生の 12 名となりました。

会員の先生方にご協力を戴いた 2013 年手術アンケートの結果について処理・解析を行っています。今回は肩関節外科における手術件数のみならず、複合手術や合併症なども含まれているため、膨大なデータ量となっています。集計作業と解析が終わり次第、雑誌やホームページ上で公表する予定です。また、結果の一部は保険収載申請のために活用させて頂きました。実態調査である手術アンケートは外科系学会社会保険委員会連合（外保連）や中央社会保険医療協議会（中医協）に対して新たな手術手技の申請・要望を行う上で、大変重要な資料となります。次回の手術アンケートは 2017 年に行う予定です。その際には会員の先生方のご協力をお願い致します。

肩関節外科における複数手術の保険収載に向けた活動として、2015 年外保連試案に「関節鏡下肩関節唇形成手術（腱板断裂手術を伴う）」「人工骨頭挿入術（肩関節）（腱移行術を伴う）」「人工関節置換術（肩関節）（腱移行術を伴う）」が収載されました。現在、厚労省のヒアリングに向け鋭意準備を行っています。

肩関節の診療において、地域格差や十分な保険算定が行われていない検査や処置が多く認められます。上腕骨近位部骨折などの肩関節周囲損傷では長期に外固定を要し、再固定の手間もかかりますが、保険の算定は簡単な処置程度でしか認められていません。超音波検査は肩関節診療において欠かせない検査となってきていますが、請求通り支給される場合や厳しく査定される場合があり、地域による格差が認められています。本委員会としては、こうした問題点を是正すべく、肩関節周囲損傷の外固定に対する保険点数の現状について調査を行っています。また、超音波検査に関しては保険請求・算定状況について地域別アンケートを行い、全都道府県における現状を調査しています。今後、これらの実態調査を踏まえ、改正や改善の要望を行っていく予定です。

担当理事	副担当理事	委員長	委員
米田　稔	中川照彦	橋口　宏	岡村健司　鈴木一秀 菊川和彦　高瀬勝己 菅谷啓之　名越　充 杉本勝正　望月智之 森澤佳三

教育研修委員会からの報告

委員長　船越忠直

教育研修委員会は、末永直樹担当理事、青木光広委員、大泉尚美委員、廣瀬聰明委員と船越忠直（委員長）、さらに講師として井樋栄二講師、井手淳二講師、柴田陽三講師、望月由講師で構成されています。

教育研修委員会の主な仕事として、教育研修会を年１回開催することであり、これまで６回を数えます。
本年より形式を大幅に変更し、

Ⅰ. 教育研修会（review）
Ⅱ. 日本肩関節学会キャダバーワークショップ
Ⅲ. 肩関節疾患手術手技フォーラム

の３本立てで行います。新しい試みがたくさんありますので、今後会員のみなさまのご意見をお伺いして、よりよい方向へ進むべく検討させて頂きます。各研修会の詳細は下記の如くとなります。

Ⅰ. 第７回教育研修会

これまでは、学会期間終了後に行われていた研修会を、本年は第 42 回日本肩関節学会学術集会期間中に行います。本年を含む今後３年間で肩関節疾患全般の分野の review を行う予定です。

【第７回教育研修会プログラム】（敬称略）

① 肩の解剖、診察 -review-（青木光広）

② 肩関節外傷性不安定症 -review-（望月由）

③ 腱板断裂の病態と治療 -review-（井手淳二）

④ 人工肩関節置換術の基礎と実際 -review-（柴田陽三）

Ⅱ. 第１回日本肩関節学会キャダバーワークショップについて

様々な先生のご尽力により、以前よりご連絡しておりましたキャダバーワークショップが下記日程で行われます。

日時：2014 年９月 26 日（土曜日）８時半から 17 時

場所：札幌医科大学解剖実習室

講師：柴田、末永、青木、大泉、廣瀬、船越

対象：日本肩関節学会員　20 名　会費８万円

Thiel 法固定全身標本　６体　両肩関節

人工関節貸与メーカー（Tornie, Zimmer, Mitek, Lima, Biomet）

Ⅲ. 第１回肩関節疾患手術手技フォーラム

キャダバーワークショップ終了後の同日に下記日程にて手術手技に焦点をあてたフォーラムを開催いたします。特にキャダバーワークショップでの講義が実際の手術でどのように実践されているかがわかるように同一講師により開催されます。会員の先生方のご参加お待ちしております。

日時：2015 年９月 26 日（土）18：00 ～ 21：30

場所：TKP 札幌駅カンファレンスセンター

担当理事	委員長	委員	講師
末永直樹	船越忠直	青木光広 大泉尚美 廣瀬聰明	井樋栄二 井手淳二 柴田陽三 望月　由

学術委員会からの報告

委員長　森澤豊

学術委員会は、以前からの後藤昌史、佐野博高、高瀬勝己、林田賢治の担当委員の先生方に、本年度から新しく柏木健児、浜田純一郎、森原徹、山本宣幸の先生方が加わりました。担当理事は畑幸彦先生、委員長は森澤豊です。

昨年度は、2014 年４月から日本でも使用可能となったリバース型人工肩関節全置換術の初期 50 例についての合併症調査を行いました。アンケートに協力して下さった施設の先生方に厚く御礼申し上げます。早期合併症を調査し報告することで、これからも共通の認識のもと新しい機械や手技が正しく普及するよう考えています。

本委員会の第一回目の企画として、肩鎖関節脱臼 (Rockwood 分類 type Ⅲ) の保存的治療についての多施設間プロジェクトを作成し、開始から２年半が経過しました。調査結果につきまして途中経過を含め、集計作業を始めました。参加して下さった施設の先生方にはお手数ですが、ご協力をお願い申し上げます。今後、

集計作業が進みましたら逐次結果を報告します。

今年度は“凍結肩”の定義について、国内外の過去の論文を渉猟し精査した後、日本肩関節学会として共通する認識を確立するよう検討しています。これまで診断基準が明らかにされていなかった肩関節疾患について、学会としての統一見解を出すことを目的に作業を進めます。

担当理事	委員長	委員
畑　幸彦	森澤　豊	柏木健児　浜田純一郎 後藤昌史　林田賢治 佐野博高　森原　徹 高瀬勝己　山本宣幸

広報委員会からの報告

委員長　池上博泰

広報委員会の構成メンバーは担当理事が望月由、委員長が池上博泰、委員が新井隆三、石田康行、北村歳男、中川泰彰、夏恒治、松村昇、山本敦史（五十音順、敬称略）の合計９名で構成されています。

広報委員会は、日本肩関節学会が理事長制度となってからできた比較的新しい委員会です。委員会の活動は日本肩関節学会を広く一般の人に知らせることと、日本肩関節学会員に種々の情報を発信していくことです。このため、日本肩関節学会のホームページを英語版も含めて充実するように努力しております。また、年に２回（２月、８月）発行されている会員へのニュースレター作成も重要な活動です。さらに玉井理事長からの要望もあって、メルマガの発行を新しい取り組みとして行っています。第一号は本年５月８日に会員に配信させていただきました。ホームページを通じてのお知らせではどうしてもタイムラグが発生しやすいので、このメルマガの配信によって会員皆様に新しい情報を迅速にお送りできればと考えています。

今後も日本肩関節学会の広報活動に積極的に取り組んでいく所存ですので、皆様からの要望や何かお気づきの点があれば、いつでも学会事務局にご連絡いただけたら幸いです。

担当理事	委員長	委員
望月　由	池上博泰	新井隆三　夏　恒治 石田康行　松村　昇 北村歳男　山本敦史 中川泰彰

財務委員会からの報告

委員長　岩堀裕介

1974 年に日本肩関節研究会として創立された日本肩関節学会は 2014 年８月１日、それまでの任意団体から一般社団法人に変わりました。法人格を有する事で法的な責任を明らかとし社会的責任を果たして行く事になった訳です。学会事業の遂行に際し、これまで以上に綿密な財務管理が必要になりました。そのため各種委員会のご協力のもと，支出削減のため以下のような学会事業の変更を行いました。①各種委員会に対しては年間の事業計画書と予算案の提出を御願いし、予定される学会収入を鑑みて適正な事業と予算計画をたてるように致しました。②昨年度から委員会や理事会を対面会議からウェブ会議に変更する事で会議室の費用や旅費の削減を行いました。更にウェブ会議も契約料の見直しを行い、今年の６月からは業者を V-cube から NTT コミュニケーションズに変更しておよそ 120 万円の経費節約を達成致しました。③印刷費・郵送費の削減、学会誌の速やかな発刊のため、2013 年これまでの紙媒体の雑誌肩関節の発展的解消を

行い、オンラインジャーナルのみの発刊を行う事になりました。④2014年1月からはメールアドレス登録をして頂き年会費を納付されている会員の皆様はJournal of Shoulder and Elbow Surgeryのオンラインジャーナルの閲覧が可能になっております。円滑な閲覧が可能となるように、会員の皆さまにおかれましては6月末までに年会費の納付をお願いしました。⑤経費確保のため、これまでの賛助会員の企業様には引き続きその継続をお願いするとともに、新規の賛助会員の勧誘やご寄附の募集活動を展開しております。また、これまで紙媒体の雑誌肩関節に広告掲載をお願いして参りました企業様には賛助会員への入会や寄附のご依頼をさせていただいております。このような一般社団法人への移行、業務量の急激な増大に対応するため、2015年初頭をもって群馬大学に御願いしておりました事務局業務をISSという会社に外部委託する事になりました。ISSの皆さんどうぞよろしく御願い申し上げます。また、群馬大学の髙岸憲二教授、小林勉先生、山本敦史先生をはじめとする群馬大学の事務局スタッフの皆様におかれましては、これまでのご尽力に対しこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

担当理事	委員長	委員	アドバイザー
柴田陽三	岩堀裕介	佐野博高　森澤佳三 鈴木一秀　山本敦史 中川滋人	吉井宏文（税理士）

倫理委員会からの報告

委員長　橋口宏

「人を対象とする医学的研究に関する倫理指針」が改正され、2014年12月22日文部科学省および厚生労働省より公布され、そのガイダンスが2015年3月31日公表されました。近年の研究多様化や不適正事案の発生等を踏まえての改正であり、全ての研究機関が本指針を円滑運用・遵守し、組織体制や内規の整備を行うよう提言されています。

また、学術集会や雑誌等で発表される研究成果の中には推進に各種企業の産学連携活動が基盤となっている場合が少なからずあります。産学連携による研究では研究機関と特定企業の相互影響が想定され、研究者の教育・研究・診療上の責務と産学連携に伴う個人的利益が衝突・相反する状況が生じます。現在の社会環境において、利益相反（conflict of interest: COI）マネージメントは社会への説明責任として研究者の義務となってきています。

こうした状況を考慮した玉井和哉理事長の提案と理事会の承認を得て、本年度より倫理委員会が設立されました。菅本一臣先生が担当理事となり、委員長橋口宏、委員として池上博泰先生、石田康行先生、伊藤陽一先生、後藤英之先生、名越充先生、二村昭元先生、さらにアドバイザーとして佐藤克巳先生の9名により本委員会が構成されました。

雑誌「肩関節」編集委員会より依頼のあった倫理委員会承認を必要とする対象論文について審議を行いました。手術器械や薬品を保険適用外の疾患や用法・用量で使用するなどの「保険適用外治療の論文」、RCT研究など「prospective研究治療の論文」、対照群として健常者が含まれる研究や健常なスポーツ選手を対象とする研究など「正常例が対象の研究論文」は各施設における倫理委員会の審査・承認が必要条件であると判断し、内容によっては本倫理委員会も審査を行うことが決まりました。これを踏まえ、各施設における倫理委員会の現状を調査することも決定しました。医学研究の審査・承認を行う倫理委員会が大学病院や大規模病院では設置されていますが、小規模病院や個人医院などでは設置されていない場合が多いです。こうした施設を対象とする本学会倫理委員会の設置を行う必要性について、倫理委員会に関する実態調査を行い検討する予定です。

日本整形外科学会や他学会では学術集会発表時におけるCOI開示が必須となっています。本学会におけるCOI要件を本委員会で現在、作成しております。出来上がり次第、学会発表や雑誌掲載における運用が行われます。

日本肩関節学会も今後数年の間に医学研究の倫理審査やCOIマネージメントが必須となっていきます。学会員の先生方には早めに十分な取り組みを行うようお願い申し上げます。

担当理事	委員長	委員
菅本一臣	橋口　宏	池上博泰　佐藤克巳 石田康行　名越　充 伊藤陽一　二村昭元 後藤英之

定款等運用委員会からの報告

委員長　中川泰彰

当委員会は、2014年８月に法人化された後に問題が生じてきた定款や委員会規則などについて、審議するために設けられた委員会です。今年の５月に第３回運用委員会が開催され、報告事項として、以下の項目がありました。

1. 第２回委員会後、理事会で審議された内容の報告
   a) 社員総会の議事録の公開：会員に公開することが理事会で決定した。
   b) 学術集会の開催内容を社員総会で議論するか：学術集会会長に一任することが理事会で決定した。
   c) 委員の任期：３期６年で、同日昼に行われた社員総会で決定した。

これらを規則としての文章に変更しました。実際の文面については、今年10月の社員総会で、定款の一部変更とともに、議論される予定です。

審議事項として、通信会員規則について議論いたしました。任意団体の肩関節学会時は、海外の名誉会員的なニュアンスであった通信会員ですが、今回の法人化での議論の末、海外の医師を通信会員とする流れとなり、その方向で文章化されています。また、この時、一番問題となったことが、年会費をどのように徴収するかでしたが、これも、事務局から提案のあった「オンライン決済」で行くことが委員会では決まりました。年会費は、15,000円で、円建てとし、希望があれば、JSESの購読も可能とすることといたしました。これらの内容については、10月の社員総会で議論していただくことになっています。

後､重要な点として､5月の臨時社員総会で決議された代議員選出規則の変更が以下のごとく､行われました。

第４条の推薦基準の（１）を以下に変更した。

1. 選挙年の４月１日現在、１０年以上この法人の正会員であった者。

現時点で、議論しつくされていない内容として社員総会の位置づけ、補欠についての具体的な内容、学会賞規則の文面変更などがあります。名誉会員、理事、代議員、会員の皆様方、定款や委員会規則で齟齬や、内容の不備な点などにお気づきになられた時は、当委員会までご一報ください。検討させていただきます。

今後とも皆様方のご支援、ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

担当理事	委員長	委員	オブザーバー
柴田陽三	中川泰彰	伊﨑輝昌 岩堀裕介 林田賢治 森澤　豊	玉井和哉

リバース型人工肩関節運用委員会からの報告

委員長　髙岸憲二

昨年４月より使用できるようになったリバース型人工肩関節全置換術は、昨年８ヶ月間の使用実績では年間ベースで従来の人工肩関節全置換術よりも多くの手術が既に行われたと推定されます。

リバース型人工肩関節全置換術は日本整形外科学会のリバース型人工肩関節全置換術ガイドライン策定委員会で策定し、日本整形外科学会理事会で認められたガイドラインを遵守することにより、治験を行わずに厚生労働省から認可された最初の人工関節全置換術です。腱板断裂や人工肩関節などの手術に習熟した整形外科専門医が日本整形外科学会認定の講習会を受講してはじめて本機種を用いて手術ができます。

使用開始後５年間は全例登録が義務になっています。委員へは各病院におけるリバース型人工肩関節全置換術の使用実績が報告されます。また、日本人工関節登録制度事務局からは、各病院における手術件数の情報をもらっています。両者を比較してみますと、現在までの登録状況はまだまだ100%に程遠い状況です。リバース型人工肩関節手術を登録していただくためには、まず初めに、各病院の倫理委員会で登録する必要があります。これらの手続きをお願いします。

さらに、残念なことに、受講資格がないにもかかわらず受講した医師がいることが最近判明しました。そこで、７月から受講者には、受講資格ならびに５年間登録に関しての誓約書に署名していただいています。

今まで当委員会は受講者の皆様の良心にお任せして受講していただいておりましたので、資格のない医師が受講されたことは委員会の全構成員にとっては非常にショックで落胆した出来事でした。これについては、一学会の一委員会がそこまで権限を持つのかとお考えになる方もおられるかもしれません。

しかし、リバース型人工肩関節全置換術は厚生労働省の方と日本整形外科学会岩本幸英前理事長が話されてガイドライン作成を決められ、それを遵守することを条件に治験を行わずに厚生労働省が認可した最初の人工関節です。厚生労働省は『ガイドラインを作成し、それを遵守すれば今後は治験を行わなくてもよい。』とのルールを作りましたが、それを継続するについてはリバース型人工肩関節が試金石となっています。現在でも委員宛に医薬品医療機器総合機構（PMDA）より、リバース型人工肩関節全置換術の合併症の頻度などについて問い合わせが入っています。条件である５年間の登録がなされませんと日本整形外科学会は厚生労働省からルールが守れない団体だと思われ、今後日本整形外科学会がガイドラインを作成することで治験をせずに手術機器の導入を厚生労働省にお願いしても認められることは難しくなります。

そのように考えますとリバース型人工肩関節運用委員会の責任は非常に大きいことがお分かりになると思います。講習会受講規定の遵守､５年間の全例登録ならびにガイドラインの遵守にご協力をお願いいたします。

担当理事	委員長	委員	オブザーバー
井樋栄二	髙岸憲二	池上博泰 中川泰彰 菅谷啓之 山本敦史	米田　稔

40 年史編纂委員会からの活動報告

委員長　筒井廣明

理事会から日本肩関節学会 40 周年にあたり、過去をしっかり記録することを目的とした１年間の臨時委員会として委員が任命され、2015 年２月 16 日（月）に web での第１回委員会を開催した。

2015 年９月までに日本肩関節学会ホームページ（以下学会 HP）のリンクサイトに掲載するために、日本肩関節学会４０年史の具体的な内容を本委員会で討議決定し、各該当者に依頼する平成２７年９月までに作成するために、下記項目のリストを作成し、具体的な内容の検討を行った。

１）理事長の挨拶文（玉井和哉先生）
２）日本肩関節研究会創設と世界の肩関節外科の情勢（信原克哉先生）
３）日本肩関節の組織体および学術集会の 40 年の経時的変遷（柴田陽三先生）
４）日本肩関節学会としての国際交流（小川清久先生）
５）アジア肩関節学会の発足と発展および韓国との関係（筒井廣明先生）
６）歴代会長のページ（回数･会長名･開催地･開催年月日､抄録集の「開催にあたって」のあいさつ文､写真）
７）名誉会員のページ（氏名・幹事就任年・名誉会員就任年）
８）物故名誉会員のページ（氏名・物故年月日・生年・幹事就任年・名誉会員就任年、顔写真と寄稿文）
９）歴代の委員会名および委員の氏名一覧表
１０）その他

髙岸直人賞受賞者・トラベリングフェローなど、学会の HP で掲載されている内容に関しては、この HP には掲載しない。

今後、年次更新するか、否かに関しては、この委員会では検討を行わない。

英語版のページおよび 40 周年記念の USB の内容の掲載に関しては理事会に上申する。

会員が保有している日本肩関節学会及び国際学会参加などの写真など、過去の資料をこの機会に集めてはどうかという意見も出された。

第２回委員会は、2015 年３月 16 日に web 会議として行われた。

第５回理事会で、企画案に関してはおおむね了解が得られたが、英語版のページに関しては、日本語版が完成してから理事会で審議すること、40 周年記念の USB の内容の掲載に関しては、著作権などの問題から掲載しないとの報告を受けた。

物故名誉会員の寄稿依頼先を決定し、ホームページ作成の見積もり依頼と、ホームページ開設後の会員への告知や日本整形外科学会などへの告知依頼などの具体的方法につき理事会に上申することとし、今後のタイムスケジュールの確認を行った。

第３回は 2015 年５月 21 日に開催され、下記９項目のページとすることとした。

１）理事長の挨拶（玉井和哉先生）
２）日本肩関節の黎明　肩関節研究会の創設（信原克哉先生）
３）組織体としての日本肩関節学会の変遷（柴田陽三先生）
４）JSS の国際交流（小川清久先生）
５）アジア肩関節学会の発足と発展（筒井廣明先生）
６）歴代会長の紹介
７）名誉会員の紹介
８）物故名誉会員の紹介
９）歴代の委員会名および委員の氏名一覧表を作成：事務局

今後のスケジュールを下記のごとく決定し、再度、寄稿のお願いをすることとした。

６月 30 日：寄稿締切
７月：業者によるページ作成、事務局および寄稿者による内容確認
８月：理事会による確認と承認
９月：本サイトへの移行と公開

担当理事	委員長	委員	アドバイザー
井手淳二	筒井廣明	伊﨑輝昌　北村歳男 内山善康　林田賢治 菊川和彦　船越忠直	小川清久

選挙管理委員会からの報告

委員長　伊﨑輝昌

本年度は、10名の代議員募集と第45回学術集会会長選挙を行います。規則に基づく候補者等の情報は、会員サイトに掲示しますので、会員専用サイト（http://www.j-shoulder-s.jp/playapp/）よりお入りいただき、ご確認いただきますようお願い申し上げます。

代議員募集について

代議員選出規則に基づき、2015年7月31日までに応募された候補者に対して下記の要領で選挙を行います。

選挙日程：

2015年8月17日から8月30日まで候補者氏名等を掲示し、正会員による異議申し立て受付（代議員選出規則第6条2）

2015年10月8日社員総会で信任、選任（代議員選出規則第6条3）

第45回学術集会会長選挙について

定款第39条に定める学術集会会長について、学術集会会長選挙規則に基づき、下記の要領で選挙を実施します。

選挙日程：

2015年7月31日までに届け出をした候補者について、2015年8月中に立候補者の氏名および所信の掲示

2015年8月中に選挙人へ選挙公報を送付

2015年10月8日社員総会で投票、開票、当選人決定

委員長	委員
伊﨑輝昌	相澤利武 山本敦史

トラベリングフェロー帰朝報告

KSES/ JSS トラベリングフェロー 報告記

高橋憲正　船橋整形外科　肩関節・肘関節センター

はじめに：本年5月の1か月間にわたりトラベリングフェローとして韓国に滞在し、多くの施設を見学する機会をいただきましたのでこの場を借りてご報告させていただきます。近年、肩に関して韓国から発信される国際学会で発表、論文の多さを常々感じていましたのでそのあたりの仕組みや取り組み方について、また手術の実際について着目し見学してきました。

対象と方法：出発前にKSESの事務局長であるOh教授からいただいた日程表によると、1カ月間に18の病院を訪問し、済州島から光州、大田、大邱、浦項、ソウルへ向かって北上する計画でした。私はKSESのannual meetingに合わせて開催されたGolf competitionに参加するために4月29日に成田から済州島に向かいました。ゴルフは来年のICSESでも予定されている名門コースでラウンドし、韓国の重鎮の先生に加え日本の重鎮である筒井廣明先生とご一緒させていただきました。コースの状態もよく天候にも恵まれ、スコアはともかくとても楽しくplayできました（図1）。KSESの学会は、英語の会場と韓国語の会場があり鏡視下手術と人工関節のライブサージャリ―を見ることができました。印象的だったのは、現在国際的に活躍されている教授が若手を対象としstudy design、研究の進め方、統計などの集中講義があり勉強になりました。

図１　韓国の重鎮の先生方と筒井廣明先生

学会では多くの日韓の肩学会員の先生方と交流を深めることができましたが、学会の終了と同時に私と山門先生の二人旅が開始されました。前述したスケジュールで移動し、主に１病院 /1 日といった感じでほぼ毎日異なる先生に会い、手術見学や観光案内をしていただき夜は食事（当然お酒も）といった毎日が繰り返されました。今回の帰朝報告では、私は韓国で見てきた手術「特に鏡視下手術」について感じたことを中心に述べたいと思います。

結果と考察：18 施設を訪問し 53 例の手術を見学しました。訪れた施設のうち大学病院が 16 施設あり、いずれも病床が 1000 くらいある大病院でした。驚いたことに多くの施設がガラス張りで新しくホテルのような作りでした。韓国の整形外科医の研修システムは米国式を取り入れていて、4-5 年のレジデントの後ミリタリーサービスを３年行い sub-specialty のための fellowship を１年経験するというのが一般的のようでした。今回訪れた多くの施設で、レジデントや fellow が我々の面倒を見てくれて、夜は一緒に食事できました。夜は飲みながら若い医師の話を聞き、彼らの将来のビジョンや韓国の整形外科事情（肩外科医はお酒が強くてレジデントの間では有名だそうです）などいろいろ深いところまで知ることができました。韓国の大学病院では、手術が効率よく行われており多くの肩関節外科医が複数の部屋を使い次から次へと手術を行っていました。ソウル国立大では手術室が 38 部屋あり教授のラウンジで各部屋の準備状況が確認できるようになっていました（図2）。

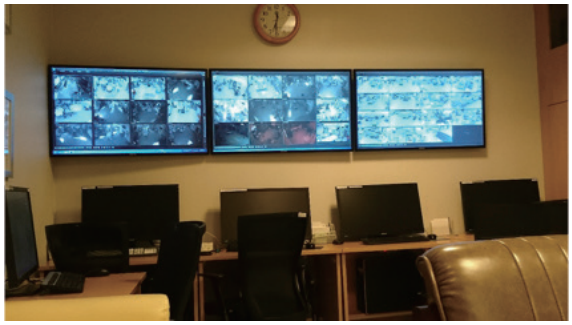
図２　Seoul National University Hospital のラウンジ

訪問した先生方の多くは年間 300 例以上の手術を行っており、大学病院のスタッフは手術をこなすということが重要な職務の一つであると感じました。一方で、臨床と臨床研究に比べ基礎研究では日本が進んでいるとの意見を何人かの先生から言われました。

見学した手術の内訳は、鏡視下腱板修復 37 例、鏡視下バンカート３例、人工関節６例、骨折５例、その他２例でした。これを見ると腱板断裂が圧倒的に多く次いで、人工関節などの変性疾患が主となっています。そこで現在の韓国で行われている鏡視下腱板修復術についてまとめてみました。すべての施設のデータではありませんが、おおよその傾向がわかると思います。体位は、側臥位が８施設、ビーチが７施設でした。麻酔時の腕神経叢ブロックは７施設で施行、４施設でなしでした。出血のコントロールとして、5 施設で３リットルに1A の割合でエピネフリンを注射していました。腱板修復時に肩峰形成をルーチンで行っているのは約８割の施設でした。腱板修復時の二頭筋腱の処置については、tenodesis 5, tenotomy 8, 温存 14 で術者の好みによってさまざまでした。腱板修復の方法は、tension free single row という概念がソウルでトレンドとなっており、suture bridge と single row の割合は半々くらいでした。シングルの際には Mason-Allen を用いた手技がしばしがみられました。縫合では、全体的には韓国発祥の SMC（Samsung Medical Center）knot が主流でしたが、あえて sliding knot ではなく Revo knot を好む先生も散見されました。その理由は knot がよりコントロールしやすいからとのことでした。腱板修復の入院期間は、1-3 日が５施設、1-5 日が２施設、5-7 日が３施設で、大病院でありながら入院期間は日本より短い傾向でした。現在特に腱板断裂に対して、多くの臨床研究を報告している韓国において、鏡視下腱板修復の実態を見ることができて非常に有意義な機会となりました。

まとめ：最後になりましたが、このような機会を与えてくれた日本肩関節学会の理事、代議員の先生方、肩学会に私を推薦してくださった鈴木一秀先生、菅谷国際委員長、私の留守中に様々な業務を分担してくれた船橋整形

図３　Seoul National Univ. で Oh 教授と

外科肩チームの先生にこの場を借りて深謝いたします。また１カ月間苦楽？を共にした山門浩太郎先生本当にお疲れ様でした。

今回の旅行に際し、滞在中の移動から食事、体調管理（飲みすぎへの配慮）、観光まで隅々まで気を配っていただいた Oh 先生を中心とした KSES の先生方に心から感謝を感じております。今後も KSES・JSS のお互いの友好と発展にわずかながらでも寄与できるように尽力させていただきます。（図３）

日韓トラベリングフェロー記

山門浩太郎　福井総合病院

この数年間、日韓関係は冷え切っています。政治・経済のみならず、一般人感覚として、「いかがなものか」と考えざるを得ない事例に事欠かず、とうとう「基本的な価値観を共有する」との表現が削除される関係（外務省ホームページ）となってしまいました。私個人の心情としても、「島」「仏像」「歴史」といった決して軽くはない問題について、韓国の意見に全く同意できません。にもかかわらず、あえてこの時期に韓国に渡り、日本肩関節学会員を代表して友好を涵養する日韓トラベリングフェローの重責ある仕事に応募したのは、「やっぱり仲良くしないとだめだろう」という、ご助言を頂いたからでした。そして、４週間の研修を終えて、「本当に行ってよかった」と感じています。この場をお借りし、国際委員長のお立場を超えてご助言ご助力をいただきました菅谷啓之先生をはじめ、全ての皆様に深謝申し上げます。

今回、船橋整形の高橋憲正先生という素晴らしいパートナーに恵まれました。高橋先生が関節鏡手術など医療についてのレポートをお纏めになられるので、私は、韓国の文化（宴会と食）について報告します。

図１　ソウル最終日の宴会後、全員酔っています

さて、韓国は「儒教の国」で長幼の序が極めて厳しいと噂されております。宴席の実際はどうかといえば、私の体験した範囲では日本の基準を外れるほどではないと感じました。年長者を敬うことに日韓に違いはありません。場の年長者が宴席の主人となり、挨拶などの仕切りをおこないます。乾杯、名刺交換、2nd round と称される二次会といった日本でも普通なことのほか、返杯の方法や特殊な酒類（爆弾酒；ポッタンジュ）など、若干異なる習慣が存在します。俯瞰するに、運動部の宴会（しかも OB の来席有りの場合）に極めて近似される様態でありました。我々トラベリングフェローのために、訪問先の病院だけでなく、地域コミュニティ主催、学会主催など、27 回！の宴会にご招待いただきました。韓国は深酔いします（図 1）。宴席の酒類では、焼酎（ソジュ、Alc. 20%～）が基本となります。その土地よって異なるブランドがあるらしいのですが、すべて緑色の小瓶にはいっています。ビールは、開宴の一杯の後は単独で飲まれることは少ないようです。

ここで、韓国特有の返杯方法について説明します。まず、立場が下のものは空のグラスを持ち教授など上位者

に差し出し酒を注ぎます。上位者は酒を空けグラスを下位者に渡して酒を満たします。下位者はその場で杯を空けます。だいたい「一気飲み（ウォンシャ、one shot）で、残すことは無礼となります。完飲強調のため、杯口を下にして頭にのせるジェスチャーもあるそうです。また、韓国では、酒の継ぎ足しはマナー違反となるそうです。この一気飲みが宴会序盤から始まるため、中盤ですでに深酔いします。次に爆弾酒ですが、この危険な酒は、そう古いものではないとのことでした。正体はソジュのビール割りカクテルなのですが、小さなグラスにソジュを入れたままビールグラスに落とし、入れ子で飲むスタイルがスタンダードです（図2）。甘い朝鮮リキュールを混ぜるバリエーションも存在します。宴席中盤になり爆弾酒がはじまると、宴席の主人自らが調製します。ビールグラスを並べたうえにソジュのグラスをセットしてドミノ倒しのように中に落としていくティーショットなる演出や、下からライトを照らす演出などビジュアルにも工夫があります。１回で５～10杯程度用意して、主人のスピーチの後、皆で立ち上がってやはり一気飲みします。終了後、グラスを集めて次席者が繰り返し、大体５～６回連続して行われます。結果、深酔いします。KSESトップのお一人であるKwang-Jin Rhee先生は、我々に「爆弾酒のルール」をご説明くださいました。ルール１．絶対に断ってはいけない。ルール２．杯を空けたら右手でグラスを振る。音が濁っていれば（酒が残っていれば）、もう３杯。ルール３．アルコール消費量とアカデミックアクティビティは正相関するので、しっかり飲むように。かくのごとく、韓国の宴席は二日酔い必至となります。

図２　爆弾酒

図３　スンデ（豚の腸に血と具材をまぜて蒸したもの）

食事は、唐辛子の使用料を除きおおむね日本のものと食材や味付けはかけ離れてはいません。しかし、次の３つの難物をご紹介します。スンデ（豚の腸に血と具材をまぜて蒸したもの、図3）、エイの発酵物ホンオフェ（アンモニア臭著明）、蚕の蒸煮ポンテギ（味は悪くないが、口の中に残る殻の触感が微妙）。詳しくは学会報告致します。

トラベリングフェローの意義の一つには文化の理解があると考えます。極めて手短ではありますが、「何を食べ飲んできたのか」についてご報告いたしました。重ねまして、このような貴重な機会を与えてくださった全ての皆様に深謝いたします。ありがとうございました。

事務局からのお知らせ

弊社（ISS）で事務局業務を引き継いでから、早６か月が経ちました。日々、諸先生方からの問い合わせや、委員会の業務を通じて、勉強をさせていただいております。

まだまだ不慣れな部分もあり、ご迷惑をお掛けしている部分もあるかと思いますが、引き続きよろしくお願いいたします。

さて事務局より会員の先生方へ、お願いとお知らせを記載させていただきます。

①年会費納付につきまして

当学会の会期は、８月１日～翌年７月31日までとなっております。

2015年８月１日～2016年７月31日までは、2015年度会期となっております。

12月頃に、2015年度の請求書をお送りさせていただきますので、「会費規則　第４条　会費の納入期限」にあります通り、事業年度末までに2015年度年会費の納付をお願いいたします。

また2014年度（2014年８月１日～2015年７月31日）年会費未納付の約400名の先生方には７月頭に再請求書をお送りさせていただきました。

おかげさまで年会費の納付をいただいておりますが、まだ約250名の会員の先生方から納付をいただいておりません。学会を円滑に運営していくためにも、年会費の納付をお願い申し上げます。

2015年度年会費請求書をお送りする段階で、2014年度以前の年会費が未納の先生には該当年の年会費を合わせた形で請求書をお送りさせていただきますので予めご了承ください。

②会員専用サイトへの認証のお願い

当学会では、会員の先生方の登録情報内容、年会費の納付状況、理事会、社員総会の議事録を会員専用サイトで確認することができます。

初めて会員専用サイトにお入りいただくためには、まず会員としての認証が必要になります。会員webログインページの「認証」から登録を行っていただき、ログインID（登録メールアドレス）、システムより配信されたパスワードでお入りください。

今後、会員専用サイトに掲載する内容を充実させていきたいと思っております。

③会員情報の更新のお願い

会員専用サイトに記載されている登録情報が事務局で把握している情報になります。

ご所属、ご自宅の住所等が変更になった場合は、会員専用サイトより変更をお願いいたします。

２月に事務局が移転しましてから、HPのお知らせ欄、一斉メール、メルマガにて会員の先生方に情報のご提供を行ってまいりました。質・量ともなお一層向上させていく所存でございますので、今後ともなにとぞよろしくお願い申し上げます。

編集後記

広報委員会
石田康行

高校野球100年の夏の甲子園が行われている８月の炎天下の中、編集後記を書かせていただいています。

今回は玉井理事長あいさつ、第42回日本肩関節学会学術集会の井樋会長あいさつ、各委員会報告、JSS/KSES トラベリングフェローの帰朝報告を掲載いたしました。御多忙中にもかかわらず御執筆いただきました先生方に深謝いたします。

これまでの私は、学会というのは発表や、意見交換をして、その後の診療に生かす場とのみ理解していました。しかし、いろいろな仕事を経験させていただくと肩関節学会では多くの先生方がお忙しいなか各委員会に所属され、学会員のためにより良い環境を作る努力をされていることを知りました。会員の皆様方にはぜひとも御一読いただきたいと思います。

広報委員の先生方、事務局には今回の編集にあたり多大なるサポートをしていただきました。この場を借りてお礼申し上げます。みんなで一つのものを作り上げる機会を経験できましたことに感謝いたします。

一般社団法人
日本肩関節学会
Japan Shoulder Society

編　集：一般社団法人 日本肩関節学会　広報委員会
望月由（担当理事）、池上博泰（委員長）、新井隆三、石田康行、北村歳男、中川泰彰、夏恒治、松村昇、山本敦史

発　行：一般社団法人 日本肩関節学会
〒108-0073　東京都港区三田 3-13-12　三田 MT ビル８階　株式会社アイ・エス・エス内
TEL 03-6369-9981 / FAX 03-6369-9982
E-mail office@shoulder-s.jp　URL http://www.j-shoulder-s.jp/